李商隠の不遇の原因に関する言説について

加固理一郎

一、はじめに

唐代の詩人で、官僚としての十分な地位を得られずに終わった者は多数あり、李商隠もその中の一人に過ぎない。だが、李商隠は、特にその不遇の生涯が強調されることが多い。その理由は、婚姻という個人的な事柄に対して大局的な政治情勢が影響を及ぼしたことが不遇の誘因となったという、独特の悲劇性による。晩唐初期の政局を揺るがしたのが、牛僧孺一派と李徳裕一派の対立すなわち牛李の党争である。李商隠は、はじめ牛僧孺党に属する令狐楚から知遇を得た。だが、令狐楚の没後、李徳裕党に属する王茂元の娘婿となった。そのため、令狐楚の息子である綯ら牛党の人々から排斥され、不遇の生涯を送ったとされる。

しかし、この説に対しては、古くから疑問が呈されていた。そして、近年の伝記研究においては、この説を否定する意見が大勢を占めている。[1] しかし、李商隠の詩歌の解釈においては、この説は、いまだ一定の影響力を保っている。[2] 本稿では、李商隠の不遇の原因に関する言説の形成過程について論じる。それによって、これが婚姻によるとする説の影響力の強さの理由を明らかにする。

二、筆記小説に見える李商隠「九日」詩の逸話

李商隠の不遇の原因を明らかにしようとする試みは、五代から北宋に始まる。それは、筆記小説『唐摭言』『北夢瑣言』に見える李商隠の「九日」詩に関する逸話であり、また、『旧唐書』『新唐書』の李商隠伝である。本節ではまず、筆記小説の逸話について検討する。そして、正史の伝記については、次節で取り上げる。

はじめに、「九日」詩を引用する。

曽共山翁把酒時　曽て山翁と　酒を把りし時

霜天白菊遶堦墀　霜天　白菊　堦墀を遶る
十年泉下無消息　十年　泉下　消息無く
九日尊前有所思　九日　尊前　思ふ所有り
不学漢臣栽苜蓿　漢臣の苜蓿を栽ふるを学ばず
空教楚客詠江蘺　空しく楚客をして江蘺を詠ぜしむ
郎君官貴施行馬　郎君　官貴く　行馬を施し
東閣無因再得窺(3)　東閣　再び窺ふを得るに因無し

この詩については、李義山七律注釈班「李義山七律集釈稿（三）」（『東方学報』京都、第五六冊、一九八四）の中で、荒井健が詳しく注釈をしている。そこで荒井氏は、この詩を令狐綯との関連によって理解する通説に対し、疑問を呈している(4)。

この詩を令狐綯と関連づけているのは、以下に示すように、五代・王定保『唐摭言』に含まれる一篇と、北宋・孫光憲『北夢瑣言』に含まれる二篇の逸話である。

まず、『唐摭言』巻十一「怨怒」から、その逸話を引用する。

李義山、師令狐文公。大中中、趙公在内廷、重陽日、義山謁不見、因以一篇紀於屏風而去。詩曰、……(5)。〔李義山、令狐文公（楚）を師とす。大中中に、趙公（令狐綯）内廷に在りて、重陽の日、義山謁して見はず、因りて一篇を以て屏風に紀して去る。詩に曰く、……。〕

ここに「大中中」とあるが、宣宗の大中元年（八四七）は、李商隠の身の上に大きな変化が起こった年である。この年、給事中の任にあった鄭亜は桂管観察防禦観察等使となった。李商隠は、秘書省正字の職を辞して亜に従い、その幕府の掌書記となった。鄭亜は、李徳裕の党派の一員である。宣宗朝には、令狐綯も属する牛党が権力を握っており、鄭亜は大中二年に循州刺史に左遷された。李商隠はこれに従わず、江南を巡った後に洛陽・長安へ帰り、盩厔県尉となり、さらに大中三年には京兆尹の属官となった。後述するように、『旧唐書』などでは、この鄭亜の幕府への赴任が令狐綯の李商隠に対する怒りを招いたとしている。ただし、この逸話は「九日」詩の制作の状況を述べたに過ぎず、令狐綯の側の反応については示されていない。

それに対して、後の『北夢瑣言』に採録された逸話では、制作の背景や、李商隠と令狐綯の心情について、より具体的に言及している。まず、『北夢瑣言』巻七「李商隠進剣表」の逸話を引用する。

李商隠員外、依彭陽令狐公楚、以牋奏受知。相国危急、有宝剣、嘗為君上所賜、将進之。命李起草、不愜其旨。

因口占云、「前件剣、武庫神兵、先皇特賜。既不合将帰泉下、又不宜留在人間。」時人服其簡当。彭陽之子綯、継有韋平之拝、似疏隴西、未嘗展分。重陽日、義山詣宅、於庁事上留題、其略云、……。相国睹之、慚悵而已。乃扃閉此庁、終身不処也。(6)

〔李商隠員外、彭陽令狐公楚に依り、牋奏を以て知を受く。相国危急にして、宝剣有り、嘗て君上の賜る所と為るに、将に之を進めんとす。李に命じて起草せしむるに、其の旨に愜せず。因りて口占して云ふ、「前件の剣、武庫の神兵にして、先皇特に賜ふ。既に合に将て泉下に帰すべからず、又留めて人間に在るに宜しからず」と。時の人、其の簡当に服す。彭陽の子綯、継いで韋平の拝有り、隴西を疏むに似て、未だ嘗て分を展ぜず。重陽の日、義山宅に詣るに、庁事上に於て留題し、其の略に云ふ、……。相国之を睹て、慚悵するのみ。乃ち此の庁を扃閉し、終身処らざるなり。〕

この逸話は、李商隠が令狐楚の知遇を得たことから語り起こされる。そして、父と同じく宰相の位に登った令狐綯が、李商隠を冷遇したとする。その理由は、牛李の党争ではなく、「似疏隴西」、つまり、李商隠が唐の王室と同じ隴西の李氏であったためではないかとされている。そこで李商隠は、「九日」詩を令狐綯の邸宅の壁に題し、その態度を批判した。それを見た令狐綯は、恥じてその部屋に入ることはなかった、という。

このように、この逸話の中では、両者は決定的に対立してはいない。それに対して、「九日」の詩が原因で令狐綯が李商隠を憎み冷遇したとするのが、次に引用する『北夢瑣言』巻二「宰相怙権」の逸話である。

宣宗時、相国令狐綯、最受恩遇而怙権、尤忌勝己。以其子滈不解而第、為張雲・劉蛻・崔瑄畳上疏疏之。宣宗優容、綯出鎮維揚、上表訴子之冤。其略云、「一従先帝、久次中書。得臣恩者、謂臣好、不得臣恩者、謂臣弱。臣非美酒美肉、安能啖衆人之口。」時以執己之短、取誚于人。或云、曽以故事訪於温岐、対以其事出南華。且曰、「非僻書也、或冀相公変理之暇、時宜覧古。」綯益怒之、乃奏岐有才無行、不宜与第。会宣宗私行、為温岐所忤、乃授方城尉。所以岐詩云、「因知此恨人多積、悔読南華第二篇。」又李商隠、綯父楚之故吏也、殊不展分。商隠憾之、因題庁閣、落句云、「郎君官重施行馬、東閣無因許再窺。」亦怒之、官止使下員外也。江東羅隠、亦受知於綯、畢竟無成。有詩哭相国云、「深恩無以報、底事是柴荊。」以三才子怨望、即知綯之

遺賢也。(7)

〔宣宗の時、相国令狐綯、最も恩遇を受けて権を怙み、尤も己に勝るを忌む。其の子滈解して第せざるを以て、張雲・劉蛻・崔瑄の畳ねて上疏して之を疏んずと為す。宣宗優容にして、綯出でて維揚に鎮し、上表して子の冤を訴ふ。其の略に云ふ、「一たび先帝に従ひ、久しく中書に次す。臣の恩を得る者、臣好しと謂ひ、臣の恩を得ざる者、臣弱しと謂ふ。臣美酒美肉に非ず、安くんぞ能く衆人の口に啖はさんや」と。時に己の短を執るを以て、誚を人に取る。或ひは云ふ、曽て故事を以て温岐（庭筠）に訪ふに、対ふるに其の事南華に出づるを以てす。且つ曰く、「僻書に非ざるなり、或ひは冀くは相公変理の暇に、時に宜しく古を覧るべきことを」と。綯益之を怒り、乃ち岐才有るも行無く、第に与かるに宜しからずと奏す。会宣宗私行し、温岐の忤ふ所と為り、乃ち方城尉を授く。岐の詩に、「因って知る此の恨み人多く積むを、読むを悔やむ南華第二篇」と云ふ所以なり。又李商隠、綯の父楚の故吏なるも、殊に分を展ぜず。商隠之を憾み、因って庁閣に題し、落句して云ふ、「郎君官重く行馬を施し、東閣再び窺ふを許さるるに因無し」と。亦之を怒り、官止めて員外に下さしむるなり。江東の羅隠、亦知を綯に受くるも、畢竟成す無し。詩有りて相国を哭して云ふ、「深恩以て報ゆる無し、底事ぞ是れ柴荊」と。三才子の怨望を以て、即ち綯の遺賢を知るなり。〕

ここでは、まず李商隠が令狐綯の待遇を怨み、「九日」詩でこれを批判したとする。それに対して令狐綯は、怒って李商隠を員外の低い官位に止めたとされる。

ただし、この逸話の主眼は、必ずしも李商隠の不遇の原因の解明ではない。これはむしろ、令狐綯の人物を貶めようとするものである。すなわち、令狐綯がその息子滈を身びいきしたことから、権力をたのんで自分に勝るものをねたむという性格を示す。そして、この性格によって温庭筠・李商隠・羅隠の三詩人が排斥されたとするのである。

しかし、この三人のうち温庭筠と羅隠に関しては牽強付会の説である。まず温庭筠だが、ここに引用された詩句の出典は、次に引用する、「李羽処士故里」詩である。

柳不成糸草帯煙　柳　糸を成さず　草　煙を帯ぶ
海槎東去鶴帰天　海槎東に去りて　鶴　天に帰る
愁腸断処春何限　愁腸断ゆる処　春何ぞ限りあらん
病眼開時月正円　病眼　開く時　月　正に円なり
花若有情還悵望　花　情有るが若く　還って悵望す

水応無事莫潺湲　水　応に事無くして潺湲たる莫し
終知此恨銷難尽　終に知る　此の恨み銷せども尽くし難きを
辜負南華第一篇(8)　辜負す　南華第一篇

この詩が令狐綯と無関係に作られたのは、詩題からも明らかである。しかし、『北夢瑣言』の逸話の中では、その結びの二句を大幅に改変して、令狐綯の無学をあてこすった言葉にしているのである。

また、羅隠に関してであるが、詩句の出典は、次に引用する「感旧」詩である。

剣佩孫弘閣　剣　佩ぶ　孫弘の閣
戈鋋太尉営　戈　鋋す　太尉の営
重言虚有位　重言して虚しく位有るも
孤立竟無成　孤立して竟に成す無し
丘壠笳簫咽　丘壠　笳簫　咽び
池臺歳月平　池臺　歳月　平かなり
此恩何以報　此の恩　何を以て報いんや
帰処是柴荊(9)　帰する処　是れ柴荊なり

確かに、これは、かつて推挙を受けた人物に対して現在の窮状を訴えた詩のようである。しかし、その人物が令狐綯であるという確実な証拠はなく、また、詩の内容も、その人物を怨んだものではないように理解できる。

『旧唐書』（巻一百七十二、列伝一百二十二）および『新唐書』（巻一百六十六、列伝第九十一）の伝記において、令狐滈は父の権力を恃んで驕慢なふるまいの多い人物とされている。そして、令狐綯が息子滈を弾劾した者を左遷したことについても、『北夢瑣言』巻二の逸話と同様に記載されている。しかし、それ以外では、綯の性格に問題があることを示す具体的な事例は示されず、かえって『新唐書』の賛では、「（杜）悰・綯、世(よ)国に当たり、亦譏るに足る無し。」とまで述べられている。それに対して『北夢瑣言』巻二の逸話では、令狐綯を正史の記載以上に狭量な人物として貶めるために、三詩人の事柄が付け加えられたのである。しかし、その中で温庭筠と羅隠については、まったくの捏造である。そこで、李商隠の「九日」詩に関しても、確かな根拠によるものではないと考えられる。

以上三篇の逸話の検討結果に従うならば、「九日」詩の理解については、李商隠が令狐綯の冷遇に対する不満を述べているようにも読める、という程度に留めておくべきである。そして、この詩が令狐綯に対する不満を述べたものであったとしても、綯がこの詩によって李商隠を憎悪したかどうかは、不明であるとしておくのが適当である。

また、これらの逸話には、李商隠の婚姻についての記載がないことにも注目したい。これは、五代から宋初において、李商隠の不遇はその婚姻によるとする説は広く行われるものではなかったことの証左である。

三、『旧唐書』『新唐書』の李商隠伝

李商隠の不遇の原因を、婚姻によって令狐綯および牛党に排斥されたこととするのは、五代・後晉、開運二年（九四五）に完成した『旧唐書』の巻一百九十下、列伝一百四十下、文苑下に収められた李商隠伝にはじまる。次に、『旧唐書』李商隠伝から、吏部試及第までの部分を引用する。

商隠幼能為文、令狐楚鎮河陽、以所業文干之。年纔及弱冠、楚以其少俊、深礼之、令与諸子遊。楚鎮天平・汴州、従為巡官。歳給資装、令随計上都。開成二年方登進士第、釈褐秘書省校書郎、調補弘農尉。会昌二年又以書判抜萃。

（商隠幼くして能く文を為り、令狐楚河陽に鎮せしとき、業りし所の文を以て之に干む。年纔かに弱冠に及び、楚其の少俊なるを以て、深く之に礼し、諸子と遊ばしむ。楚天平・汴州に鎮せしとき、従ひて巡官と為る。歳ごとに資装を給し、計に随ひて都に上らしむ。開成二年方めて進士の第に登り、釈褐して秘書省校書郎たりて、弘農の尉に調補せらる。会昌二年又書判を以て抜萃せらる。）

この引用部分に続くのが、以下に示す一節である。ここに、李商隠の不遇の原因とされてきた王茂元の娘との婚姻が記されるのである。

王茂元鎮河陽、辟為掌書記、得侍御史。茂元愛其才、以子妻之。茂元雖読書為儒、然本将家子、李徳裕素遇之。時徳裕秉政、用為河陽帥。徳裕与李宗閔・楊嗣復・令狐楚大相讐怨。商隠既為茂元従事、宗閔党大薄之。時令狐楚已卒、子綯為員外郎、以商隠背恩、尤悪其無行。俄而茂元卒、来遊京師、久之不調。

（王茂元河陽に鎮せしとき、辟して掌書記と為し、侍御史を得。茂元其の才を愛し、子を以て之に妻あはす。茂元読書して儒為りと雖も、然れども本将家の子にして、李徳裕素より之を遇す。時に徳裕政を秉り、用つて河陽の帥と為す。徳裕と李宗閔・楊嗣復・令狐楚と大ひに相讐怨す。商隠既に茂元の従事と為りて、宗閔の党大ひに之を薄んず。時に令狐楚已に卒し、子の綯員外郎と為り、商隠の恩に背くを以て、尤も其の行無

きを悪む。俄かにして茂元卒し、京師に来遊するも、之を久しくして調せられず。）

ここまでの『旧唐書』の記事からは、会昌二年（八四二）まで順調に官途をたどっていた李商隠が、王茂元の娘との婚姻を期に、一転して不遇の身となった印象を受ける。これは、『旧唐書』の撰者が婚姻の時期を誤ったことによっている。すなわち、王茂元が河陽節度使となったのは、会昌二年のことである。しかし、後述するように、実際には李商隠はそれ以前に王茂元の女婿となっていたのである。しかし、この誤りだけが原因なのではなく、意図的にそのような印象を与える記述にしているとも受け取れる。

それは、まず、令狐楚の死去についての記事の置かれた位置である。令狐楚の没年は、『旧唐書』巻一百七十二、列伝一百二十二の令狐楚伝に開成二年とあり、これは李商隠の進士及第直後のことである。ところが、李商隠伝では、その進士及第の年が開成二年と明記されているにもかかわらず、この年に令狐楚が没したという記事はない。そして、李商隠の婚姻の後に、その記事が置かれるのである。このような操作によって、吏部試及第まで順調に官途をたどったのは、すべて令狐楚の庇護のためであると取れる記述になっているのである。

さらに、この一節に記された王茂元と李徳裕との関係についても問題がある。王茂元が李党の一員であったことについては、古くは清の徐逢源が疑問を呈し、さらにその後、岑仲勉が「玉渓生年譜会箋平質」[10]にて、詳細な考証を加えた上で否定している。その岑氏の論考の中で、特に注目すべきは、王茂元が李徳裕に優遇されていたことの唯一の具体的な証拠として『旧唐書』で示される「時徳裕秉政、用為河陽帥。」に対する反証である。[11]この一節は、劉稹の反乱にあたって、宰相李徳裕が討伐軍の司令官の一人として王茂元を河陽節度使に任命したことを指している。その後、王茂元は反乱軍に敗北し、さらに軍中で病気になる。すると李徳裕は王宰に河陽行営諸軍攻討使を兼務させ、王茂元の軍権を王宰に移した。岑氏は、王宰の任命に当たり李徳裕が作った「請授王宰兼行営諸軍攻討使状（王宰に兼行営諸軍攻討使を授くるを請ふ状）」（『会昌一品集』巻十五）を示すが、確かに、李徳裕はこの状の中で、王茂元の欠点を冷徹に指摘している。このことから、王茂元は李徳裕の庇護を受ける党人ではないと判断できるのである。岑氏の議論にさらに付け加えるならば、『旧唐書』巻一百五十二、列伝第一百二、王栖曜の伝に附された王茂元伝には、李徳裕との特別な関係についてまったく記述がなく、これもま

た李商隠伝と整合していないことが挙げられる。以上から、『旧唐書』の撰者は、婚姻が李商隠の不遇の原因であるとの結論を先に設定して、それに合致するように史実に操作を加え、李商隠の伝記を構成したとも疑われるのである。

次に『新唐書』の李商隠伝であるが、骨子は『旧唐書』と同じである。しかし、上述の『旧唐書』の疑問点が多少なりとも改められている。以下に、『新唐書』巻二百三、列伝第一百二十八、文藝下の李商隠伝から、王茂元の娘との婚姻から、鄭亜に仕えるまでの部分を引用する。

王茂元鎮河陽、愛其才、表掌書記、以子妻之、得侍御史。茂元善李徳裕、而牛李党人嗤謫商隠、以為詭薄無行、共排詆之。茂元死、来遊京師、久不調、更依桂管観察使鄭亜府為判官。亜謫循州、商隠従之、凡三年乃帰。亜亦徳裕所善、綯以為忘家恩、放利偸合、謝不通。(王茂元河陽に鎮せしとき、其の才を愛し、掌書記に表して、子を以て之に妻あはせ、侍御史を得。茂元李徳裕と善く、而して牛李の党人商隠を嗤謫し、以て詭薄無行と為し、共に之を排詆す。茂元死し、京師に来遊するも、久しく調されず、更に桂管観察使鄭亜の府に依りて判官と為る。亜循州に謫せられ、商隠之に従ひ、凡そ三年にして乃ち帰る。亜も亦徳裕の善くする所にして、綯以て家恩を忘れ、利に放りて偸合せりと為し、謝して通ぜず。)

ここで注目すべきは、『旧唐書』の「茂元雖読書為儒、然本将家子、李徳裕素遇之。時徳裕秉政、用為河陽帥。」の部分が、「茂元善李徳裕」と簡略になっていることである。これは、王茂元の河陽節度使就任が李徳裕の優遇の証拠とならないことが明らかであるためであろう。そして、『旧唐書』では、李商隠の婚姻について「子綯為員外郎、以商隠背恩、尤悪其無行。」とあり、令狐綯が最も憎んだとしているのに対して、『新唐書』では、ここではまだ令狐綯のことは記されない。そして、「亜亦徳裕所善、綯以為忘家恩、放利偸合、謝不通。」とあるように、鄭亜に従ったことで、はじめて令狐綯が李商隠を憎んだとしている。

おそらく、『新唐書』の撰者は、王茂元が李党の一員であることにすでに疑問を持っていたのであろう。一方で、鄭亜が李党に属することについては疑問の余地はない。そのため、李商隠と令狐綯の決裂の決定的な理由を、鄭亜の幕府への赴任としたのである。さらに、ここでは、前節で取り上げた、宣宗の大中年間のこととされる『唐摭言』『北夢瑣言』の逸話も、参照されているのではなかろうか。

四、清代以降の伝記研究

その後、清初に至って、朱鶴齢が李商隠の年譜を作るが、それは、『旧唐書』『新唐書』の伝記に従っている。その年譜に対して、徐逢源は次のように述べる。

論者以為王茂元壻、又従事桂林、遂謂党賛皇之党。不知茂元自有王涯為之道地、又得中人之助、所恃不独一衛公也。惟鄭亜始終為衛公所引。然従亜非義山本懐、又不過一年。[12]

（論者王茂元の壻と為り、又桂林に従事するを以て、遂に賛皇の党に党せりと謂ふ。茂元自ら王涯之が為めに道地し、又中人の助を得る有りて、恃む所独り一に衛公のみならざるを知らざるなり。惟ふに鄭亜始終衛公の為に引かる。然れども亜に従ふは義山の本懐に非ずして、又一年に過ぎず。）

ここでは、王茂元は李党の一員でないことが指摘されている。その理由として挙げられるのは、「茂元自有王涯為之道地、又得中人之助、所恃不独一衛公」である。先に述べたように、『旧唐書』の王茂元伝には、河陽節度使への任命も含めて、李徳裕と王茂元との特別な関係を示唆する記述はなく、むしろ王涯・鄭注や宦官との関係が詳しく記されているのである。

この徐逢源の説に対して、馮浩は次のように反論する。

義山少為令狐楚所賞、此適然之遇、原非為入党局而然。惟是開成時既以綯力得第、而乃心懐躁進、遽託涇原、此旧伝所云綯以背恩、悪其無行也。綯之悪義山実始於此、非遅至徳裕用茂元帥河陽時。……其後以鄭亜為李衛公所善、遂李并及鄭、而綯之悪義山、尤不能釈矣。然則赴鄭幕者、所以重綯之怒。其実早怒其得第而背恩、固非従衛国而遷及之也。[13]

（義山少くして令狐楚の為に賞せらるるは、此適然の遇にして、原より党局に入ると為すに非ずして然り。惟ふに是れ開成の時既に綯の力を以て第するを得るも、而して乃ち心に躁進を懐き、遽かに涇原に託すは、此旧伝の綯背恩を以て、其の行無きを悪むと云ふ所なり。綯の義山を悪むは実に此に始まり、徳裕の茂元を用って河陽に帥せしむる時に至るに遅るるに非ざるなり。……其の後鄭亜李衛公の為に善くせらるるを以て、李を逐ひて并せて鄭に及び、而して綯の義山を悪むは、尤も釈く能はざるなり。然して則ち鄭の幕に赴くは、綯の怒りを重ぬる所以なり。其の実早に其の第を得て恩に背くを怒り、固より衛国に従ひて之に遷

及するに非ざるなり。）

馮浩は、李商隠が王茂元の娘と結婚した時期に関する『旧唐書』の誤りを正している。その考証によれば、まず、李商隠は開成三年、二十七歳の時に博学宏詞科を受験したが及第せず、同じ年に涇原節度使王茂元の幕府に入り、その娘と結婚するのである。

すなわち、この婚姻は、王茂元が河陽節度使に任命される以前のことなのである。そこで、『旧唐書』李商隠伝の王茂元についての「李徳裕素遇之。時徳裕秉政、用為河陽帥」の記事が真実であったとしても、婚姻と牛李の党争との関連性は弱かったことになる。しかし、その一方で、開成二年の進士及第の直後に、李商隠は王茂元の女婿となったのも明らかになった。進士及第は令狐綯の支援によるものだが、及第するや直ちに綯のもとを去ったのは、「躁進」の行いである。そのため、令狐綯はこれを背恩として怒ったとされるのである。

そしてまた、鄭亜の幕府への赴任であるが、徐逢源はこれが令狐綯の怒りを招くようなものではなかったとする。それに対して馮浩は、「赴鄭幕者、所以重綯之怒」として、先に背恩の行いがあったので、このことが令狐綯の怒りをより強くしたとする。つまり、馮浩は、李商隠の不遇の原因を、令狐綯の怒りとする。しかし、その怒りは、牛李の党争と関係した政治的な理由によるものではない。むしろ、李商隠が令狐綯の援助を受けて進士及第を果たした直後に、王茂元の女婿となったということに、倫理的な問題があるとするのである。

馮浩に次いで、張采田が作成した年譜が『玉渓生年譜会箋』である。これは、李商隠の伝記研究において現在に至るまで重視されており、その不遇の原因について議論する際にも、その出発点とされることが多い。その年譜では、再び令狐綯と王茂元を「異党」の人と認めるのである。[14] そのため、李商隠の不遇については、やはり牛李の党争との関連で議論されるのが常となっている。しかし、すでに徐逢源と岑仲勉が論じているように、令狐綯と王茂元が対立する党派に属していなかったことを、史料に基づいて客観的に証明するのは容易である。そこで、最初に述べたように、伝記研究においては、その不遇の原因が婚姻にあるのを否定する説が、すでに大勢を占めているのである。

だが、李商隠の婚姻について牛李の党争との関連を否定したとしても、馮浩の言う倫理面の問題が残される。この問題には、当時の社会風潮など歴史資料から判断すべき要素とともに、令狐綯と李商隠がそれぞれその事実をどのよ

うに感じていたかという、心情的な要素が含まれる。そこで、この問題に関して彼らの心情を明らかにするためには、主に李商隠の詩文が材料とされている。その中には、例えば「錦瑟」詩のように、その婚姻が不遇を招いたのを嘆いているようにも解釈できるものがある。そのために、作品研究においては、この説の影響力がいまだ失われていないのである。

ただし、李商隠の詩歌は、典故表現によって重層的な意味を発生させることがその特徴とされる。そのような作品は、多様な解釈が可能であり、読者の意図的な読み方を許容するものである。それらを歴史資料と同列に扱って議論するのは、好ましくない。そこで、李商隠の不遇についてその詩歌を題材に検討するに当たっては、解釈の幅の狭い作品のみを材料にすべきであろう。(15)

注

(1) 傅璇琮「李商隠研究中的一些問題」(『文学評論』一九八二年第三期、中国社会科学院出版社、七六～八五頁)がその代表である。

(2) 例えば、松浦友久編『続校注唐詩解釈辞典(附)歴代詩』(大修館書店、二〇〇一)の李商隠「錦瑟」詩の項目(高橋良行執筆、五二三～五二四頁)では、傅璇琮の説に触れつつも、旧説に従ってこの詩を解釈している。

(3) 劉学鍇・余恕誠『李商隠詩歌集解(増訂重印本)』(中華書局、二〇〇四)第三冊、一〇二七頁

(4) ……こんなほとんど罵倒に近い皮肉を投げつけてよいとすれば、何をいっても安心な、よほど親密な間柄か、さもなくば縁切り覚悟で喧嘩を売ったかだろう。では、その相手とされる令狐綯と義山の関係は、当時どのようであったのか。義山が綯に与えた―詩題に綯の官名があるなどして確実な―作品は、十一首を数える。そのうち本詩と同時期とされる、大中二年ないし四年の三首、……さらに加えて文一篇……、これら一連の詩文が、綯に対して敬愛というよりは鄭重をきわめる姿勢に終始するのを「九日」と比較すれば、内容の共通性が見事に皆無なこと、異様に感じられるほどだ。(三五八頁)

(5) 『唐摭言』(上海古籍出版社、一九七八)一二五頁

(6) 『北夢瑣言』(上海古籍出版社、二〇〇二)一六〇頁

(7) 『北夢瑣言』(同前)三三頁

(8) 劉学鍇『温庭筠全集校注』(中華書局、二〇〇七)上冊、三七一頁

(9) 『羅隠集』(中華書局、一九八三)八〇頁

(10) 張采田『玉渓生年譜会箋』(排印本、中華書局、一九六三)附録、二一三～二六二頁、初出『歴史語言研究所集刊』一五

(11) 論者又謂商隠一生有関党局、夫徳裕会昌秉政五年餘、商

隠居母喪已超其三分之一、……然商隠二年書判抜萃、官止正九品下階之秘書正字、無関政局、何党之可言。抑開成前王茂元四領方鎮（邠・容・嶺南及涇原）、均非徳裕当国時所除、『会昌一品集』「請授王宰兼攻討状」云、「王茂元雖是将家、久習吏事、深入攻討、非其所長。」徳裕又非曲護茂元如党人所為者。……是不特商隠非党、茂元亦非党。（二一四頁）

(12) 馮浩『玉渓生年譜』（排印本『玉渓生詩集箋注』附録三、八七七頁、上海古籍出版社、一九七九）に引用された本文による。

(13) 同前、八七八頁

(14) 夫義山幼年受知令狐、此不過適然之事、及得第資綯之力、始有党籍可言、而遽婚於茂元、依恃其異党之人、此子直所以悪其背恩、交誼漸乖也。其後正書秘邱、従事桂海、皆贅皇党人所汲引、則義山去牛就李、固已久矣。

張采田『玉渓生年譜会箋』巻三、大中二年、一四〇頁

(15) 拙稿「李商隠の転機―『驕児詩』を中心として―」（中国文化学会『中国文化―研究と教育―』第五八号、二〇〇〇、六七～七八頁）は、そのような作品のひとつである「驕児詩」を出発点として、李商隠の不遇について論じたものである。

（横浜市立大学）